

アルナ・ウクイスナは産業スパイとして佐藤快一に近づいていたはずだった。

アルナは佐藤の勤める薬品会社の治験データを求め、雨天の夜に彼に接触した。

彼女は佐藤の外見と内面について広く知っている状態で、彼に接触した。

この男はやさしい性格をしていた。しかしそれにしても、と言いたくなるような、単純ではないやさしさの持ち主だった。合理的でありながら感情の重要性を理解し、世の中の人間のほとんどもがろくでもない結論付けつつも人への期待を決して捨てられない。良く言えば達観し、悪く言えば歪んでいた。

その日——佐藤にとってはなんでもない日、アルナにとっては作戦実行日——天気は快晴だった。冬のそれは青々と澄み切っていた。前日の雨のおかげで路面は濡れていて、水たまりも点々とあった。

佐藤は目の前で水たまりの中に落ちたハンカチを拾わずに無視することをしなかった。そもそも何か思うよりも早く広い、拾ってから手が濡れたことに気付いた。

「落としたよ」

ぶつきらぼうな言い方だった。そんな物言いは彼の専売特許だと古い知人は言う。

「あ——」

音ともとれる声を出しながら振り返ったアルナに、佐藤は一瞬見惚れた。しかし鋼の三倍の硬度を誇る意思を以って、無表情を貫く。抱きかけた感情はトラウマと直結していた。

「じゃあ」

無事に渡し終えると、さっさと彼女を彼は追い抜かした。翌日の会社での朝礼時、再びその顔を見ることになるとは知らずに。結局、ふたりの縁は絡まって繋がった。

母国は彼女を新入社員として潜入させることを作戦の第一歩として定めていた。そしてその美貌と内面を踏まえればあとは流れ作業で済むと考えていた。しかし、作戦の成功まで想定の上十二倍の時間を要した。

その要因はふたつあった。佐藤の傷心ぶりがそれほどまでにひどかったこと、アルナが彼の心の傷を癒すことに本気になってしまったことだ。

ふたりのこのころはたしかにつながった……つながっていた時期が間違いなくあった。すこしのくもりもない『しあわせ』があった期間があった。しかし誰もが知っているように、いつまでも変わらないことなどないのだった。

アルナは自身が所属する機関を裏切ることなどできなかった。母と弟の無残な死体を見ることを彼女が望めなかったため、彼女は結局、佐藤の生体情報を利用して治験データを盗んだ。同じ寝台で愛し合ったその足で法を犯した彼女は涙こそ流さなかったが、罪悪感で軋む心を押しさえつけるために見るに耐えない無表情をつくった。

翌日、裏切りにあったことを知った佐藤も同じような表情をした。その胸中には以前とは違って限りなく濃い愛執が充満していた。その晩、男は海を越えた。